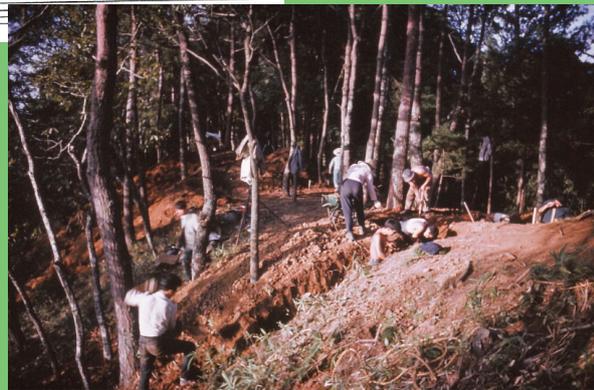
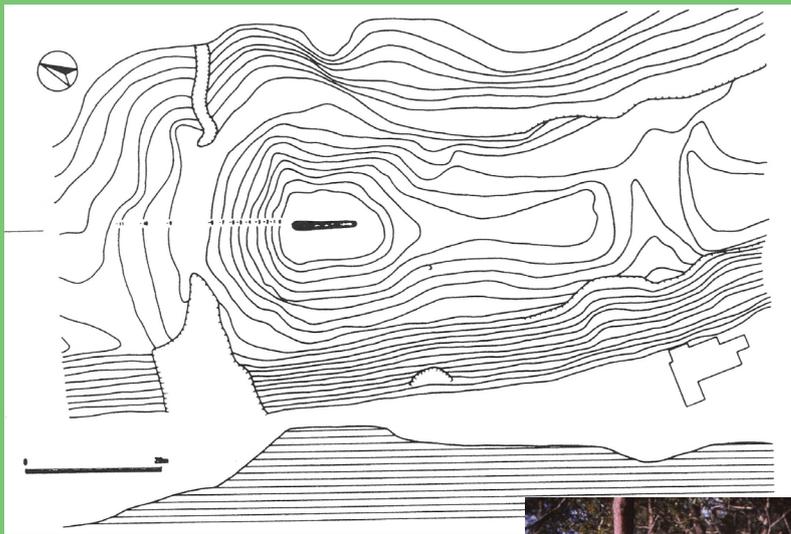


第 7 回 若手研究者による研究報告会 発表要旨



開催趣旨

考古学研究会東京例会では、2014年度から年1回、大学院生をはじめとする若手研究者がみずからの研究成果を発表する場を提供してきました。今回も卒業論文・修士論文、そして現在取り組んでいる最新の成果を披露していただけるものと思います。今年度は新型コロナウイルスの感染拡大の影響で、大学での勉強・諸活動や執筆のための資料調査などに多くの困難が生じました。こうした厳しい環境のなか、本日は関東地方に在住する7名の若手研究者が口頭発表いたします。対象となる時代は、縄文時代から昭和時代にいたる幅広いものであります。今回の東京例会は、オンラインによる発表となりますが、活発な議論を期待しています。

また、東京例会では、2012年より毎年冬に開催される例会時に、2011年3月11日に発生した東日本大震災を忘れることがないように、さまざまな取り組みを行ってきました。近年は、各地の地方公共団体・団体から復興支援のための発掘調査に従事された方々にご発表をお願いしてまいりました。今回は震災関連報告として、三瓶秀文さんに福島県富岡町における資料保全の問題について報告をいただきます。本年は、震災の発生から10年となります。過去に例を見ない災害において、危機に瀕した地域社会を再生させていく試みをご紹介いただきます。改めて、震災・災害・地域・文化財を参加者とともに考えてみたいと思います。

日程

11:00 開会

- | | | |
|-------------|--|------|
| 11:00～11:40 | 研究報告1 田邊 えり (埼玉県教育委員会)
「関東地方における縄文時代晩期前半期の地域間関係
—姥山式土器の検討を中心に—」 | 1 頁 |
| 11:40～12:20 | 研究報告2 白川 美冬 (東海大学 文学部)
「東北・関東地方における前方後方墳と周辺環境」 | 9 頁 |
| 12:20～13:00 | 昼休憩 | |
| 13:00～13:50 | 震災関連報告 三瓶 秀文 (福島県 富岡町役場 健康づくり課
放射線健康係長, 教育委員会併任)
「東日本大震災・原子力発電所事故からの資料保全
～福島県富岡町から」 | 17 頁 |
| 13:50～14:30 | 研究報告3 兩宮 健祥 (東京大学大学院 博士後期課程)
「三角縁神獣鏡における仏獣鏡」 | 25 頁 |
| 14:30～14:40 | 休憩 | |
| 14:40～15:20 | 研究報告4 大熊 久貴 (明治大学大学院 修士課程)
「古墳時代方形区画遺構の出現と展開」 | 33 頁 |
| 15:20～16:00 | 研究報告5 箕浦 絢 (世田谷区教育委員会)
「両頭金具と鏃からみた古墳時代弓矢の機能—関東の事例から」 | 41 頁 |
| 16:00～16:10 | 休憩 | |
| 16:10～16:50 | 研究報告6 津田 富夢 (駒澤大学 文学部)
「古代東北における瓦生産に関する研究
泉森窯跡の生産体制を中心に」 | 49 頁 |
| 16:50～17:30 | 研究報告7 薄井 聡 (日本大学 文理学部)
「太平洋戦争期における関東地方の飛行機用掩体壕の考古学的研究」 | 57 頁 |
| 17:30 | 終了 | |

東北・関東地方における前方後方墳と周辺環境

白川 美冬 (東海大学 文学部)

概要

本稿では、東北・関東地方の前方後方墳を、墳丘方位と立地・水辺・山岳・太陽の観点から検討した。その結果、全ての前方後方墳は水辺から半径 3 km 未満の範囲に築造され、水と倭人の葬送習俗が要因であることを推察した。また、集成編年 2 期は築造規範の変容期であり、当該時期に衰退する規範と隆盛を迎える規範の二者が存在することが確認された。両者には造墓意識や規範に差が認められ、前者は内部意識型前方後方墳、後者は外部意識型前方後方墳と理解される。つまり 2 期の変容とは、東海地方から波及し、受容地側で採用されていた狭域的な築造規範から、近畿中枢勢力が指向するようになった広域的な築造規範への転換であったと解釈できる。

1. 時期別の様相

①前方後方墳の墳丘方位

指向される南東～南西・北西 『前方後円墳集成』編年 (近藤 1991) に準拠して対象資料 114 基の時期区分をおこない、まず墳丘方位を概括的に分析した。その結果、前方部が向く方位は南東～北西が優勢であることが判明した (図 1)。つまり、関東地方の前期前方後円 (方) 墳で確認された様相が、東北・関東地方の前方後方墳でも追認されたといえる (西ほか 2003)。

時期別の傾向としては、1～4 期まで南東～南西向きが優勢であり、同じく優勢である北西向きは、2 期に最盛期を迎え減少することが判明した (図 2)。また出現率を比較したところ、南東～南西向きは 3～4 期に増加傾向がみられたのに対し、北西向きは 3～4 期に減少傾向にあることも明らかとなっている。こうした様相は、(1)3 期以降に南へ墳丘方位を統一する動きが存在した、(2)北西向きは一時的な流行であった、のいずれかまたは双方が連動したものと理解される。

回避される北～東 南東～南西や北西が指向された一方で、北～東は回避される傾向にある。北～東への回避傾向は 2 期に出現して以降、継続して認められ、関東地方では北～東向きを指向する事例が 2 期に消滅し、東北地方では 4 基のみ確認されている。南方向への指向性が近畿地方でも報告されていることを踏まえれば、北～東を回避する傾向は、(1)2 期に近畿地方の方位規範の影響力が増加した、(2)北～東を忌避する方位規範が存在していた、のいずれかまたは双方が連動したものの解釈が可能となる。

②前方後方墳と立地

墳丘方位と立地 前方後方墳の立地を平地・台地・段丘・丘陵・丘陵頂に大別した結果、1 期には平地・台地・段丘が拮抗するが、2～4 期には平地が劣勢となることが判明した。また、2 期は台地、3 期は丘陵、4 期は段丘が優勢となることも確認された。このことは、吉備地域の前方後円墳の立地について宇垣匡雅氏が指摘する「①被葬者が統括した集団の成員によって仰ぎ見られる、②集団の外部から遠望される、③古墳、つまり被葬者 (の霊) が領域を見おろす」 (宇垣 2004 158 頁) といった解釈が、関東・東北の前方後方墳に適用されるのは 2 期以降であることを意味する。

墳丘方位と地性線 本稿では、「後方部中央から地形の地性線沿いに標高の高い側を見た向きを 0° とし、地性線と古墳方位のなす角度」(西ほか2003 658頁)を検出し、地性線との位置関係を平行・斜交・直交・自由立地(地性線の影響を受けない平坦部)に分類した。その結果、1期に優勢であった自由立地型が2~4期に劣勢となり、そうした変化と連動するかたちで平行型が優勢となることが確認された。また、斜交型においては、2期に一時的に増加し、3~4期にかけて減少することも判明している。こうした様相は、2期以降に認められた高所への指向性を反映する動きだと解釈される。

意図的に北~東を指示する2基 ここで一度、2期以降に墳丘方位を北~東へ向けた蒲生田4号墳(出羽国・2期)、長井戸古墳(陸奥国・3期)に視点を移したい。蒲生田4号墳は平行型に区分される前方後方墳であり、特徴的な古墳の配置が成されている。同一丘陵上に築造された平行型の蒲生田3号墳(出羽国・3期)は、既存の蒲生田4号墳より標高の高い位置に築造され、双方の前方部が尾根上で向き合う特殊な墳丘方位の配置をとる(図3)。

こうした様相は、大阪府玉手山古墳群(4世紀)などで認められてはいるが、前方部が向き合う構図を取る事例は全国的にも稀である(宇垣2004 北條2013)。すなわち、蒲生田4号墳では、蒲生田古墳群が営まれた地域の習俗的な方位規範ないし河内地域等との共通性を有した方位規範が採用され、前方部を向き合わせる事が可能な同一丘陵上の尾根を意図的に選択した可能性が高いといえる。

長井戸古墳は斜交型の前方後方墳である。北西~南東ラインの地性線上に築造され、墳丘軸線は北東~南西を指示することから、地域独自の習俗的な方位規範が採用された可能性が高い(図4)。つまり、古墳時代前期には広域かつ普遍的な方位規範と狭域かつ習俗的な方位規範とが併存しており、近畿地方の方位規範の影響力が2期以降に増加した結果、北~東を指示する事例が劣勢になったと解釈される。

③前方後方墳と水辺

水辺の距離 前方後方墳の後方部中央から半径3km未満の範囲に存在する河川・海・沼池を検出した結果、全ての前方後方墳が水辺から半径3km未満の範囲に築造され、そのうち93基(約82%)は水辺から半径1km未満の範囲で確認されることが判明した。全ての前方後方墳が水辺付近に築造される様相は、前方後方墳の築造条件に水辺への隣接が必須であったことを意味する。

また、古墳の最短距離に位置する水辺が河川となる事例は85基(約75%)確認されており、その出現率は2~3期に増加することが判明した。加えて、古墳の最短距離に位置する水辺が沼池となる事例は3期に消滅し、古墳の最短距離に位置する水辺が海となる事例は4期に消滅することも確認されている。つまり、前方後方墳を河川付近に築造する動きが2期以降に生じたと理解される。

河川と前方後方墳の位置関係 古墳の最短距離に位置する水辺が河川となる85基を対象に、河川と墳丘軸線の平行・直交関係を検出したところ、それらは平行型58基、直交型27基に大別された。東北・関東地方の河川が基本的に南流することを踏まえれば、河川を基準とした築造規範の存在が、南方向への指向性となって顕在化したと理解される(図5)。

時期別の特徴としては、1期に双方が拮抗し、2~4期に平行型が優勢となることが挙げられる。墳丘軸線を河川に平行させる動きが2期に出現したことを踏まえると、2期は何らかの転換期であった可能性が高い。また、10期に再度出現する前方後方墳は直交型のみが採用されることも確認された。関東地方の前方後方墳では、横穴式石室の導入に伴って河川平行型が河川直交型へと変化することが指摘されており、こうした様相は東北・関東地方の前方後方墳においても追認されるといえる(吉井2009)。

④前方後方墳と山岳

墳丘軸線から左右 5° 未満の範囲に山岳等の頂上を確認された前方後方墳は29基存在する。しかし、山岳地帯が国土の約70%を占める日本では、墳丘軸線と山岳が偶然一致する

可能性も否定できない。そこで上記の条件を満たし、(1)墳丘方位が北～東を指示する、(2)墳丘軸線が火山を指示し、古墳築造時期と火山活動時期が一致する、のいずれかに該当する事例を検出した。その結果、(1)に該当する事例は 2 基、(2)に該当する事例は 3 基確認され、山岳を基準に墳丘軸線を設定した可能性が高い事例は、1 期の陸奥国・下総国・武蔵国で限定的に確認された(図 6)。つまり、方位設定に山岳との関係を持ち込む前方後方墳は少数であり、それらは造営者がときに採用することもある、随時的・個別的な対処であった可能性が高いといえる。

⑤前方後方墳と太陽

墳丘軸線が年間の太陽の出現範囲内を向く事例は 37 基存在する。そのうち、墳丘軸線が二至二分の日の出・日の入から±5°未満の範囲を向く事例は 20 基確認され、それらは春分・秋分関連=6 基、夏至・冬至関連=11 基、夏至関連=3 基に大別される。

夏至や冬至に関連する 14 基を、夏至日の出・冬至日の入ライン(北東～南西)、冬至日の出・夏至日の入ライン(南東～北西)に細別化した場合、前者が 4 基、後者が 10 基となった。特に、冬至日の出・夏至日の入ラインと一致する 10 基においては、墳丘方位を夏至の日の入(北西)へ向ける事例が 7 基を占めている。つまり、東北・関東地方の前方後方墳で北西が優勢となった要因の 1 つが、夏至の日の入を意識した軸線設定にあるといえよう。

2. 周辺環境に関する予察

①水と倭人の葬送習俗

水辺周辺に前方後方墳が築造される様相は、東北・関東地方の前方後方墳における唯一の共通項である。では、なぜ前方後方墳は水辺周辺に築造されたのだろうか。前方後方墳が埋葬施設であることを踏まえれば、葬送儀礼に水が必要不可欠であったとの仮説が立つ。3 世紀末の倭国を記録した『三国志』「烏丸鮮卑東夷伝」倭人の条によれば、「已葬、擧家詣水中澡浴、以如練沐」(陳寿 1959 855 頁)との記載がある。また、『晋書』「四夷伝」倭人の条では「已葬、擧家入水澡浴自潔、以除不祥」(房玄齡 1997 2536 頁)との記述がある。つまり、3 世紀末の倭国では、埋葬行為終了後に不祥の除去を目的とした沐浴が行われていたと解釈できる。

こうした埋葬行為後の沐浴は、8 世紀の文献資料である『古事記』や『日本書紀』でも記載が認められることから、長期間継続的に行われた普遍的な行為であった可能性が指摘できる。実際、『古事記』では『「穢國而在祁理。故、吾者爲御身之禊」、到坐竺紫日向之橘小門之阿波岐此三字以音原而、禊祓也』(緑川 1958 69 頁)との記載がある。また、『日本書紀』では「吾前到於不須也凶目汚穢之處。故當滌去吾身之濁穢、則往至筑紫日向小戸橘之檜原、而祓除焉」(大塚 1994 56 頁)との記述が認められた。つまり、3 世紀末の倭国に存在した不祥とは穢れを意味し、埋葬行為後の沐浴とは穢れ祓いであったと解釈できる。したがって、埋葬行為に関与し穢れを受けた人々は、水中で穢れ祓いを行う必要があったため、前方後方墳を水辺周辺に築造することは必然であったと理解される。

②2 期の変容

立地・水辺・山岳・太陽の傾向を時期別に整理したものが図 7 である。図に示すとおり、2 期には山岳や火山を指向する一群が消滅し、墳丘方位に北～東を採用するもの、築造場所に平地や平坦部を選択するもの、河川に墳丘軸線を直交させるものが減少する。その一方で、墳丘方位に北西を採用したもの、地性線に平行・斜交させるもの、河川と平行させるものが増加していく。つまり、2 期は築造規範の変容期であったと理解される。

また、本稿では『前方後方墳集成』東北・関東編(近藤 1994)、『前方後方墳集成』補遺編(近藤 2000)、『前方後方墳を考える』(東海考古学フォーラム 1995)に記載された前方後方墳を対象に分析を行ってきた。上記の文献はいずれも前方後方形周溝墓が前方後方墳

に含有されている。そこで、1～4期における前方後方形周溝墓の出現率を検出したところ、1期=68%、2期=17%、3期=15%、4期=5%となり、2期に造墓数が激減することが確認された。1期に半数以上を占めた前方後方形周溝墓が、2期以降に段築を有する前方後方墳に淘汰されていく様相は、築造規範の変異と連動すると考えられる。

さらに、副葬品が出土した前方後方墳の数を時期別に分類したところ、堅櫛・石釧・鉄剣・農具・短甲が副葬された前方後方墳は2期に出現することが判明した。加えて、1期と2期では、玉類は1基⇒10基、鏡類は2基⇒6基、鉄刀は1基⇒5基、工具は2基⇒7基と増加することもわかっている。2期に副葬品が出現・増加する様相を踏まえれば、2期は前方後方墳に関係する諸要素が連動的に変容を遂げる時期であったと解釈される。

③二者の前方後方墳

議論を簡略化するために、2期に減少し4期まで劣勢となる築造規範を第1群、2期に増加し4期まで優勢となる築造規範を第2群と仮称した場合、古墳時代前期の前方後方墳における築造規範は以下のように再整理される。

<第1群>

- ①段築を有さない(前方後方形周溝墓)。
- ②平地上に築造される。
- ③墳丘軸線は地性線の影響を受けない。
- ④墳丘軸線が河川と直交する。

<第2群>

- ①段築を有する。
- ②台地・段丘・丘陵上に築造される。
- ③墳丘軸線が地性線と平行する。
- ④墳丘軸線が河川と平行する。

併用される築造規範 以上の区分に基づき、東北・関東地方の前方後方墳を大別すると、第1群の築造規範のみを採用した前方後方墳は、安久東古墳(陸奥国・2期)と三ノ耕地1・2・3号墳(武蔵国・1期)の4基に限定されることが確認された。加えて、第2群の築造規範のみを採用した前方後方墳には、元島名将軍塚古墳(上野国・2期)をはじめとする計23基が該当することが判明している。つまり、大多数の前方後方墳は、第1群と第2群の築造規範を折衷したもの、あるいは地域的な規範に基づくものと解釈される。このように、第2群と第1群の諸要素が併用されることは、2期の変容が第2群の築造規範を携えた諸地域との支配従属関係に基づく事象ではないことを意味する。言い換えるならば、対等な同盟関係・競合関係の構築を目的に、造墓集団が自発的に第2群の築造規範を導入したとの解釈が妥当であろう。

また、第2群の築造規範のみを採用した前方後方墳が、1～4期にかけて増加し続けることも確認された。第2群を導入するにあたり、伝統的な古墳の築造規範を安易に排除することは、保守的な地域住民との軋轢を生むことに繋がりにかぬない。ましてや、前方後方墳の築造という大規模な土木工事の実施には、人的資源が必要不可欠であり、労働力となる地域住民との間に摩擦が生じることは回避する必要がある。そこで、双方の築造規範を併用した前方後方を築造し、第2群の築造規範を浸透させることで、第1群から第2群への変換を容易にさせる狙いがあったと考えられる。

第1群と第2群の相違 では、第1群と第2群の相違とはどのように考えられるのか。墳墓形態に注目すると、第1群は前方後方形周溝墓という平面的な墳墓が採用されたのに対して、第2群は段築を有した立体的な墳墓が採用されている。平面的な墳墓形態を採用した場合、古墳は至近距離まで接近しなければ視認できず、日常的に目にする人間は集団内部の者に限定される。一方で、立体的な墳墓形態を採用した場合、その規模によって視認範囲には誤差が生じるものの、集団外部の人間から遠望されるようになり、集団内外の人間が視認可能となる。事実、第1群に該当する4基と、第2群に該当する23基の墳丘規模の平均を算出した結果、前者は平均31.48mとなるのに対して、後者は55.26mとなり、平均値の差が23.78mに及ぶことも確認された。こうした様相を加味すれば、第1群は集団内部からの

視認を前提とした内部意識型の前方後方墳で、第2群は集団の内外を対象とした外部意識型の前方後方墳である可能性が高い。

第1群を内部意識型前方後方墳、第2群を外部意識型前方後方墳とする認識は、立地・河川と墳丘軸線の位置関係においても適応される。立地を比較すると、第1群では平地が採用され、第2群では集団の外部から遠望される台地・段丘・丘陵といった場所が採用された。また、河川と墳丘軸線の位置関係を比較した場合、第1群は河川に墳丘軸線を直交させるのに対して、第2群は河川に墳丘軸線を平行させている。古墳時代前期には古墳がランドマーク的機能を有しており、航海中の船からの視認が重視されたため、墳丘軸線を海岸線に平行させることで、視覚的に古墳を大きく見せたことが指摘されてきた(石村 2017 森 1986)。当時の交通手段が海や河川を利用した海上交通であることを踏まえれば、河川に墳丘軸線を平行させた前方後方墳は、河川を運行中の船からの眺望を意識した可能性が高い。こうした様相を踏まえれば、第1群と第2群の相違とは、前者が集団内部からの視認を意識した前方後方墳で、後者は集団内外からの視認を意識した前方後方墳であったと解釈される。

内部意識型から外部意識型への転換 それでは、内部意識型から外部意識型への転換はなぜ生じたのだろうか。その要因の一つに、古墳時代に誕生した近畿中枢政権と各地の権威者間の広域的な同盟関係の存在が挙げられる。そもそも、弥生時代後期～終末期における権威者間の優劣関係は、大陸側から流入した玉類等の物品に依拠したものであり、不安定性を有するものであった(谷沢 2019)。しかし、卑弥呼が239年6月に魏王朝へ朝貢し、同年12月に「親魏倭王」との命を受け、大陸側と君臣関係が結ばれたことでその様相は一変する。近畿中枢勢力と同盟関係を締結することで、安定的な物品の流入が見込まれるようになったためである。

こうした状況下で派生したのが、近畿中枢勢力と各地の権威者間の広域的なネットワークであり、同盟関係を確認するための戦略こそが、葬送儀礼の共有ないし威信財の授受であった。つまり、外部意識型でみられた古墳の広域的可視化は、造墓集団が自発的に中枢政権の築造規範を導入した結果であり、同盟関係の構築を目的としたものであった可能性が高い。言い換えるならば、内部意識型から外部意識型への転換とは、東海系の移住集団ないしは各々の集団が保持する習俗的な築造規範から、近畿中枢政権から得た直接的な築造規範への転換であったと理解される。

今後の展望

以上、東北・関東地方の前方後方墳を、墳丘方位と立地・水辺・山岳・太陽の観点から分析し、前方後方墳を理解する手掛りを周辺環境の観点から提供してきた。今後は、前方後方墳が誕生した可能性が指摘されている近江を含む東海地域や近畿地域を対象に分析を進めると同時に、前方後円墳との比較検討も実施していきたい。

参考文献

- 石村智 2017 『よみがえる古代の港』 平文社
 宇垣匡雅 2004 「古墳の立地とはなにか」『古墳時代の政治構造』 青木書店
 大塚信一 1994 『日本書紀』 岩波書店
 近藤義郎 1994 『前方後円墳集成 関東・東北編』 山川出版社
 近藤義郎 2004 『前方後円墳集成 補遺編』 山川出版社
 谷澤亜里 2019 「玉から弥生・古墳時代を考える」『考古学講義』 ちくま新書
 陳寿 1959 『三国志』 中華書局
 東海考古学フォーラム 1995 『前方後方墳を考える』 第3回東海考古学フォーラム
 西琢朗・百田博宜・藤盛紀明・北條芳隆 2003 「関東地方の前方後円墳のデータベースとその後」『日本土木学会 2003 年度大会報告』 日本土木学会

北條芳隆 2013 「東の山と西の古墳」『考古学研究』59号

房玄齡 1997 『晋書』中華書局

緑川亨 1958 『古事記 祝詞』岩波書店

森浩一 1986 「潟と港を発掘する」『日本の古代3 海をこえての交流』中央公論社

吉井理 2009 「関東地方における前方後円墳の墳丘方位について」『日々の考古学2』東海大学考古学研究室編

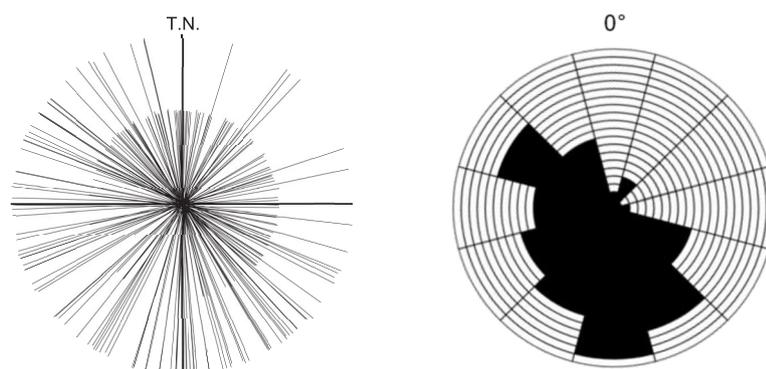


図1 東北・関東地方における墳丘方位の傾向(114基)

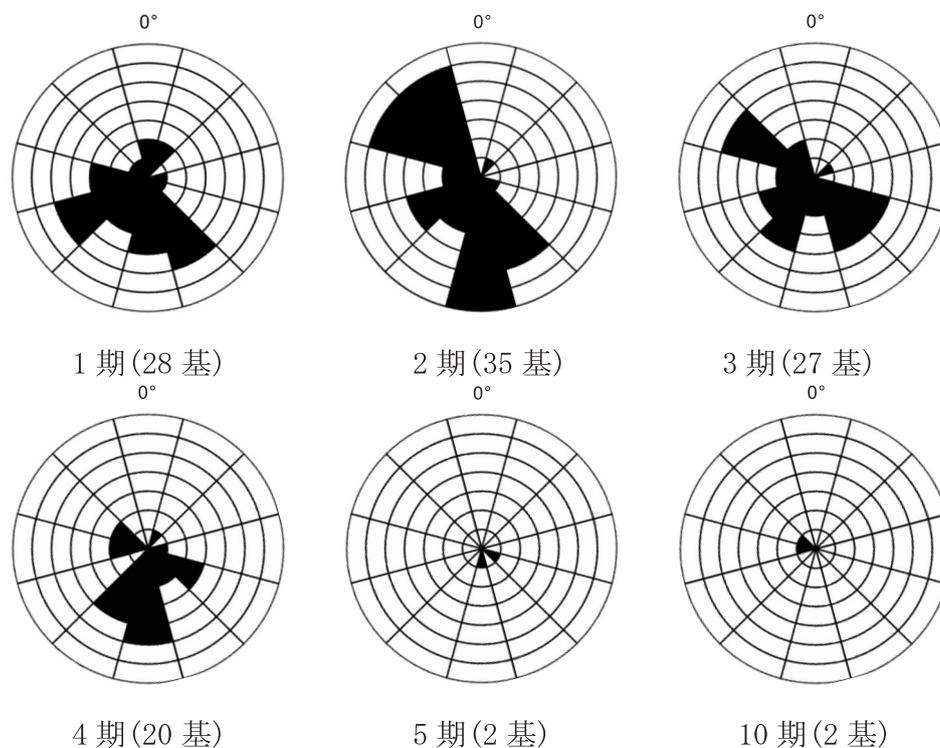


図2 墳丘方位の時期別傾向

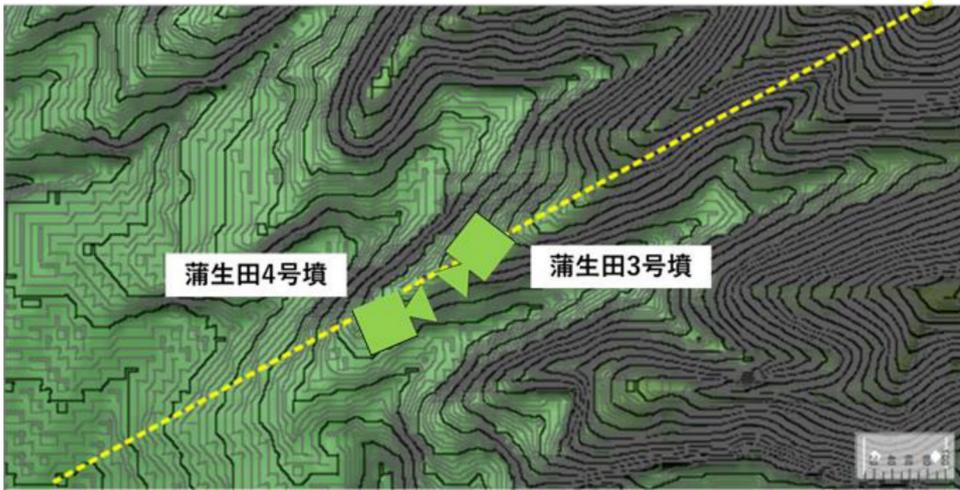


図 3 蒲生田 3・4 号墳の立地

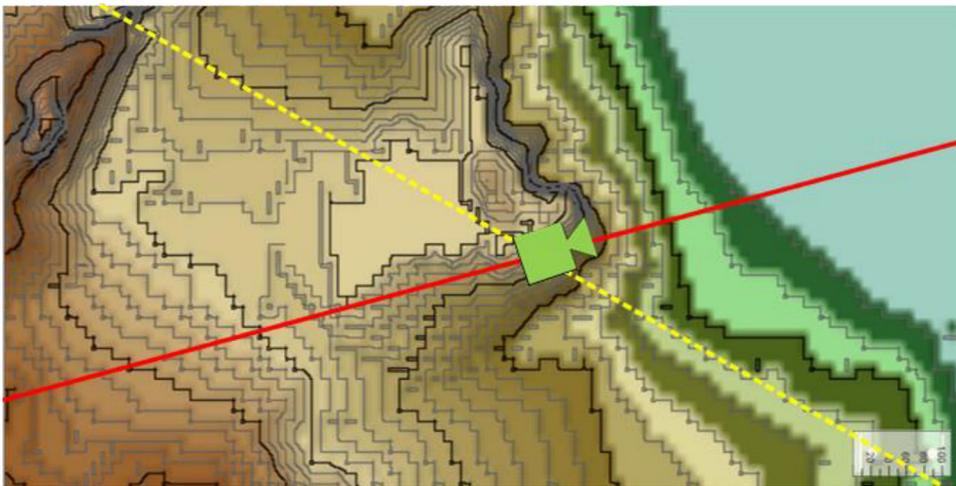


図 4 長井戸古墳の立地

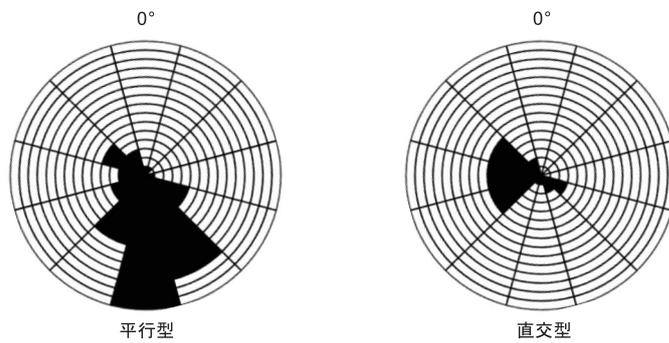


図 5 平行型と直交型の方角傾向

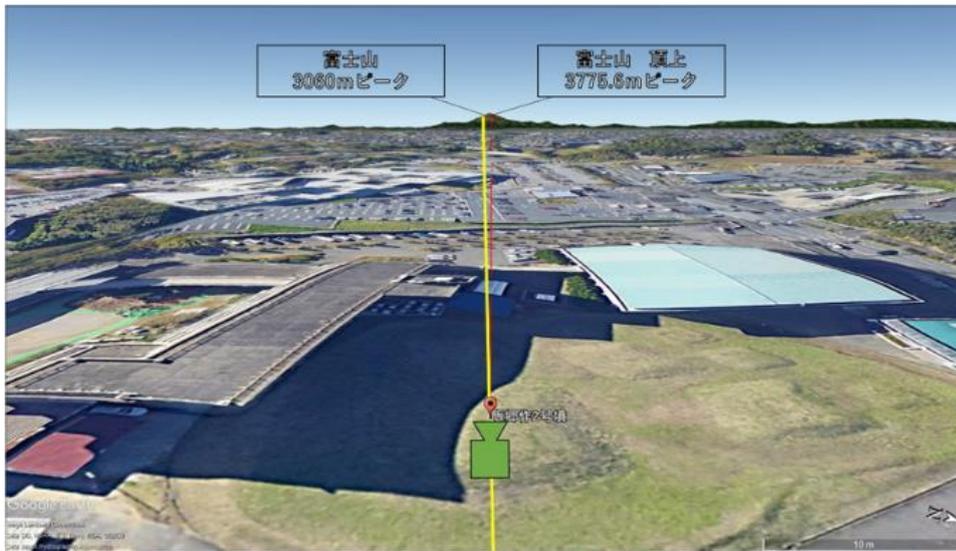


図6 火山を指向する事例(飯郷作2号墳)

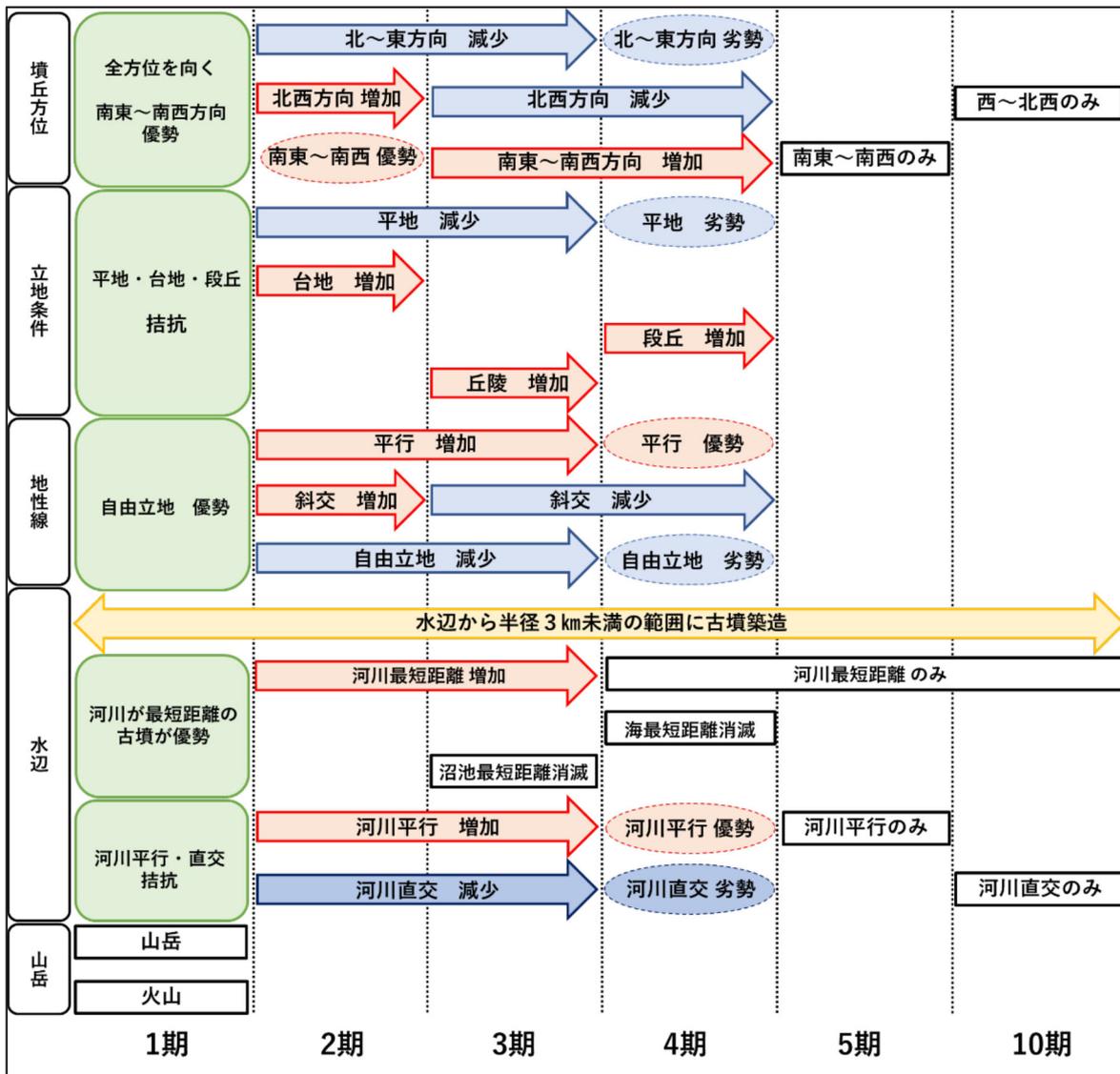


図7 分析結果模式図